

高校生男子の肥満の不利益意識について

廣原 紀恵*・服部 恒明**・高橋 優子***

(2003年10月6日受理)

Attitude of male high school students toward the disadvantage caused by obesity

Toshie HIROHARA*, Komei HATTORI** and Yuko TAKAHASHI***

(Received October 6, 2003)

はじめに

思春期にみられるやせ願望、ボディイメージのゆがみ、肥満化の傾向は現代社会がかかえる大きな問題である。多くの青年がやせ願望を抱くようになる背景には、肥満に対する不利益意識があるが、この意識は現代の文化社会的な要因の影響を受けている。そこでやせ願望はしばしば健康上の必要性とは無関係に強化され、ときには、過度なダイエット行動や摂食障害へと連動することになる（北川と加藤；1989，折井；1997）。とりわけ若い女性において、自分の体型を実際よりも肥満していると評価し（今井ら，1994；木田ら，1994；江田と井美，1995），やせ願望からダイエット行動へと移行する傾向があることが多く報告されている（丸山ら，1993；矢倉ら，1993；矢倉ら，1996）。一方，男性では自分の体型を実際よりも肥満しているとイメージする傾向は明瞭ではなく（Tanaka, et al., 2002），やせ願望も女性より顕著ではない（江田と井美，1995）。男性では若年期より身体をより筋肉質に変質させたい願望があるため（古川ら，1991；古川，1993；McCabe, et al., 2003），女性を対象とした研究とは異なった観点から男性のボディイメージややせ願望の研究を進める必要がある。しかし，男性を対象とした研究は限られており，未だ多くの未解決な問題が残されている。中でも身体的にはほぼ成熟しているが，精神的には未熟な時期と言われる高校生に関しては，やせ願望やボディイメージについて，古川（1993），江田と井美（1995），矢倉ら（1996），藤田ら，（2002）が言及しているのみである。本研究では男子高校生が肥満している状態について主としてどのような不利益意識をもっているかについて検討することを目的としている。

*茨城県立勝田工業高等学校（〒312-0016 ひたちなか市松戸町3-10-1）

**茨城大学教育学部（〒310-8512 水戸市文京2-1-1）

***麻生町立方小学校（〒311-3801 行方郡麻生町立方643）

対象と方法

茨城県内の県立高等学校に在学する男子高校生1年生から3年生687名を対象に、肥満の不利益意識に関する質問紙調査を実施した。調査時期は2001年7月で、授業担当教諭から簡単な説明の上行われた。解析に用いたのは十分な回答を得られた538名である。（有効回答率78.3%）

調査内容は肥満の不利益に関する項目、やせ願望及びダイエット行動等に関する項目の多岐にわたるものであるが、肥満の不利益意識に関しては、予備調査および既報の女子を対象とした研究から（竹田と服部2001）、肥満の不利益意識に関する5つの構成因子を仮説設定し、その因子と対応する15の設問を準備した。回答は、「全くあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「とてもあてはまる」の5件法で得たのち、それらの回答に1-5点を配分した。つぎに、肥満の不利益意識は5つの下位構成因子からなるという2次因子構造について検証的因子分析を適用し、モデルの有効性について検証を試みた。分析には統計パッケージソフトSPSS (11.0J) と AMOS (4.0) を用いた。

結 果

調査対象者の身長、体重、BMIの平均値及び標準偏差を表1に示した。文部科学省から2002年に報告された、平成13年度の学校保健統計調査による15-17歳男子の身長、体重の全国平均値は168.6-170.9cm、体重は60.1-62.8kgで、それと比較すると大きな差はなく標準的体格とみなせる。

肥満の不利益意識を構成する概念因子として「性格的不利益」、「社会的不利益」、「健康の阻害認識」、「経済的不利益」、「運動の阻害認識」の5つの構成因子を仮説設定し、その因子と対応する15の設問に対する平均値、標準偏差および尖度、歪度の結果を表2に示した。平均値は「太っている人は生活習慣病にかかりやすい」が3.2、「太っていると体を動かしにくくなる」が、3.2と高く、低い項目は「太っている人は何事にも消極的になる」の2.1、「太っている人は気が弱い」は2.1であった。各設問は尖度および歪度の分布が偏っている項目がないことから、設問の回答分布に著しい偏向はないものと判断した。

表1 身長・体重・BMIの平均値及び標準偏差

	平均	S.D.
身長 (cm)	169.3	5.88
体重 (Kg)	62.2	11.99
BMI (Kg/m ²)	21.7	3.79

表2 構成概念と観測変数との対応 (N=538)

	平均	S.D.	歪度	尖度
性格的不利益				
V3 太っている人は気が弱い	2.1	1.05	0.42	-0.74
V10 太っている人はずぼらである	2.2	1.15	0.42	-0.80
V13 太っている人は何事にも消極的になる	2.1	1.15	0.58	-0.66
社会的な不利益				
V2 太っていると人間関係に支障が出る	2.2	1.20	0.40	-1.01
V5 太っているといろいろなファッションを楽しめない	3.0	1.32	-0.24	-1.02
V11 太っていると男女交際の機会が減る	2.7	1.39	0.13	-1.25
健康の阻害認識				
V4 太っている人は生活習慣病にかかりやすい	3.2	1.33	-0.39	-0.87
V12 肥満は体調不良の原因になりやすい	2.9	1.43	-0.12	-1.30
経済的不利益				
V6 太っている人は食費がかかる	3.1	1.41	-0.14	-1.16
V7 太っていると就職や出世に不利になる	2.2	1.22	0.51	-0.85
V8 太っている人は洋服代などにお金がかかる	2.3	1.26	0.44	-0.85
V14 太っていると日常的な出費が多くなる	2.4	1.33	0.40	-1.05
運動の阻害認識				
V1 太っていると体を動かしにくくなる	3.2	1.39	-0.37	-1.13
V9 太っている人は運動が好きではない	2.5	1.36	0.39	-1.01
V15 太っている人は運動が苦手である	2.5	1.34	0.27	-1.04

肥満の不利益意識が5つの概念因子からなるという仮定のもとに検証的因子分析を実施した結果、適合度指標（GFI）は0.909、修正適合度指標（AGFI）は0.872を示し、このモデルの適合性は概ね良好である。しかし、「運動の阻害認識」に対応する1次因子群である「太っている人は運動が苦手である」の因果係数は0.83、「太っている人は運動が好きではない」は0.78であるのに対し、「太っていると体を動かさにくい」では因果係数が0.39とやや小さかった。そこでこの観測変数（設問項目）を削除し、残る14の観測変数を用いて再度分析を実施した。その結果は図1に示した。このモデルの適合度指標（GFI）は0.936、修正適合度指標（AGFI）は0.905を示した。そこで、高校生男子における肥満の不利益意識は、「健康の阻害意識」を含む5つの構成概念からなるモデルとして捉えることが出来る。この結果は、服部と竹田（2002）が同様な方法を用いて女子大生について分析したところ4つの構成概念からなることを明らかにしていることとは異なる傾向を示した。

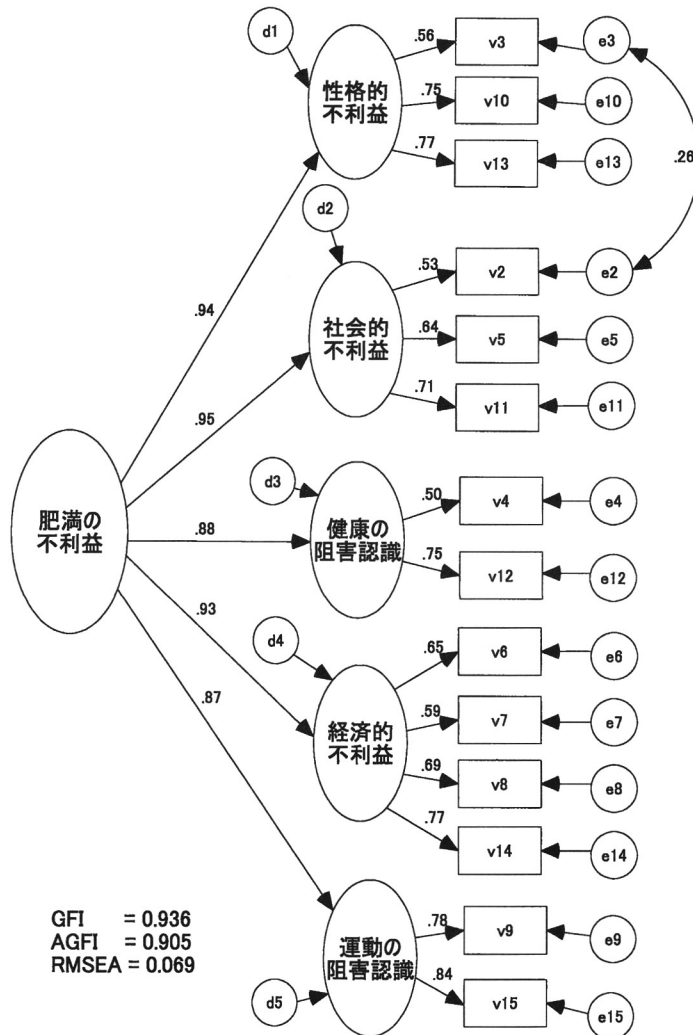


図1. 高校生男子の肥満の不利益に関する二次因子モデル

考 察

肥満の不利益意識を構成する因子として「性格的不利益」、「社会的不利益」、「健康の阻害認識」、「経済的不利益」、「運動の阻害認識」の5つの因子を仮説設定し、共分散構造分析を実施した。その結果、これらは、肥満の不利益意識の構成因子として妥当なものであった。男子高校生において、肥満は経済的に「食費や洋服代」がかかるという不利益意識を持ち、さらに、性格的には、「気が弱く」「消極的」になることがうかがえる。このことは、江上ら（1995）の報告による肥満傾向の女子の性格が、誠実で協調性に富み、遠慮がちで我慢してしまうということと共通する傾向を含んでいる。次に社会的な不利益としては「人間関係に支障をきたし」「男女交際の機会」にも不利になるという意識があることがわかった。さらに社会的、経済的な不利益意識よりは低いものの、健康や運動に関しても阻害の認識があることが確認できた。肥満と生活習慣病との関連性についての知識が高校生男子に比較的多く受け入れられていることがうかがえる。また、高校生男子では大学生女子よりも学校教育において教科としての体育や部活動等において運動する場面が多く、肥満者は非肥満者よりも持久力、瞬発力等が低い傾向（川上と山本、1986；金ら、1993；横山、1993；藤原ら、1994）を観察する機会が多いことなどにより、肥満による運動の阻害認識がいつそう明瞭になったと考えられる。ただし、運動の阻害認識に対応する観測項目として用意した「太っていると体を動かしにくい」という設問が除外されたが、これは設問内容が単に日常生活の中における動きやすさを問うものであり、肥満がそのような日常動作までも妨げるものではないと捉えているからである。

服部と竹田（2002）の大学生女子を対象とした報告では、「肥満の不利益」の構成概念として4因子を示している。本調査では、「運動の阻害認識」の因子を加えた5つの因子からなるモデルの適合性が高いことが示されたことから、高校生男子は肥満の不利益を女性より多面的に捉えているが、基本的には男女で共通する認識構造を持っていると考えられる。しかし本研究は仮説検証的方法によるものであり、今後設問の基本統計に基づく基礎的な研究を実施する必要があるだろう。

引用文献

- 江上いすず・長谷川 昇・大矢みどり. 1995. 「女子学生の食行動と性格特性からみた肥満の成因」. 『栄養学雑誌』, 53, 191-198
- 江田節子・井美昭一郎. 1995. 「高校生のやせ願望に関する研究」. 『栄養学雑誌』, 53, 111-118
- 古川 裕. 1993. 「思春期の若者が志向する体型」. 『小児保健研究』, 52, 340-346
- 古川 裕・澤田 淳・荒堀憲二・橋本 勉. 1991. 「中学生が志向する理想的体型」. 『思春期学』, 9, 338-344
- 藤田佑子・鈴木里美・栗石瑞生・渡邊タミ子・大山建司・中村和彦. 2002. 「思春期男子のボディイメージに関する研究」. 『思春期学』, 20, 363-370
- 藤原章司・山神眞一・植村典昭. 1994. 「大学生の体格と運動能力の推移」. 『学校保健研究』, 36, 231-237
- 服部恒明・竹田優子. 2002. 「女子大学生の肥満意識とやせ願望の関連」. 『学校保健研究』, 44, suppl. 408-409
- 今井克己・増田隆・小宮秀一. 1994. 「思春期女子の体型誤認とやせの実態」. 『栄養学雑誌』, 52, 75-82
- 川上幸三・山本道隆. 1986. 「肥満児・るい瘦児の体格並びに体力・運動能力の特性」. 『保健の科学』, 28, 495-499

- 金 憲経・松浦義行・田中喜代次・稲垣 敦. 1993. 「肥満女子中学生の体力・運動能力の特性」. 『体力科学』, 42, 380-388
- 北川 俣子・加藤達雄. 1989. 「大学生における Bulimia と Binge - Eating の頻度」. 『学校保健研究』, 31, 286-291
- 木田和幸・田伏千代子・真野由紀子・孫 光・木村有子・西沢義子・三田禮造. 1994. 「思春期女子の体型認識と理想像」. 『学校保健研究』, 37, 561-566
- 丸山千寿子・伊藤桂子・生地本礼子・今村素子・土井佳子・田中たえ子・阿部恒男・江澤郁子. 1993. 「女子学生における食行動異常に関する研究（第1報）」. 『思春期学』, 11, 51 - 56
- McCabe, M.P., Ricciardelli, L. A. 2003. Body Image and Strategies to Lose Weight and Increase Muscle among Boys and Girls. *Health Psychology*, 22, 39-46
- 折井亜子. 1997. 「摂食障害の発症と心理学的機序に関する研究」. 『小児保健研究』, 56, 578-586
- 竹田優子・服部恒明. 2002. 「女子大学生のやせ願望とダイエット行動の関連」. 『学校保健研究』, 44, suppl. 410-411
- Tanaka, S.・Itoh, Y.・Hattori, K. 2002. Relationship of Body Composition to Body-Fatness Estimation in Japanese University Students. *Obesity Research*, 10, 590-596
- 矢倉紀子・広江かおり・笠置綱清. 1993. 「思春期周辺の若者のヤセ願望に関する研究（第一報）－ボディ・イメージと BMI, 減量実行との関連性－」. 『小児保健研究』 52, 521 - 524
- 矢倉紀子・笠置綱清・南前恵子. 1996. 「思春期周辺の若者のやせ願望に関する研究」. 『看護展望』, 21, 82-87
- 横山泰行. 1993. 「中・高校における痩身児と肥満児の体力と運動能力」. 『学校保健研究』, 35, 293-303